第46回「日本ITU協会賞」受賞

2018年5月17日の「第50回世界情報社会・電気通信日のつどい」において，ネットワーク開発部の榮 浩三とR＆D戦略部（北京研究所）の陳 嵐が，日本ITU協会賞「功績賞」，移動機開発部の原田 浩樹と無線アクセス開発部の内野 徹，ネットワーク開発部の阿部 元洋が日本ITU協会賞「奨励賞」を受賞しました．功績賞は，世界情報社会サミットにおける基本宣言および行動計画の実現および国際標準化，国際協力に関するITUなどの活動または我が国のITUなどに関連する諸活動に貢献し，その他情報通信および放送の発展に寄与し，その功績が著しい者に贈られます．また，奨励賞は，功績賞に該当する諸活動にすでに参加し，今後これらの領域において継続して寄与することが期待される者に贈られます．

榮は，ITU-Tにおいて，オペレータ要求条件に基づくSDH（Synchronous Digital Hierarchy）*1/ATM（Asynchronous Transfer Mode）*2伝送装置管理用情報の定義，管理インタフェースの高機能化に貢献し，またETSI（European Telecommunications Standards Institute），3GPP（3rd Generation Partnership Project Long Term）ではMANO（Management and Orchestration）*3を用いた仮想化網管理の効率化，高機能化と両団体間の仕様作成における連携に貢献した功績が認められ，功績賞を受賞しました．

陳は，3GPP標準化活動を中心に従事し，世界各国で導入が進む5G New RadioおよびeLTE（enhanced LTE）技術の仕様作成に大きく貢献し，4.8～5.0GHzの中国5G周波数帯への盛込みを促進し，日中共通周波数帯ハーモナイゼーションを推進した功績が認められ，功績賞を受賞しました．

原田は，3GPP標準化において，LTE/LTE-Advancedのスモールセル向け拡張技術やアンライセンスバンド利用技術，5Gの無線アクセス技術における技術議論を主導するなど，世界的に注目度・期待度の高い技術仕様の早期策定に貢献し，今後もモバイル技術・産業の発展に寄与することが期待され，奨励賞を受賞しました．

内野は，LTE-Advanced，IoT，および5Gの標準化において，無線I/Fプロトコルの技術議論を主導して仕様策定を行うとともに，ラポータなどのとりまとめ役を務め，3GPP標準化に多大に貢献し，今後上位のサービスも意識した技術提案，交渉にリーダーシップを期待され，奨励賞を受賞しました．

阿部は，VoLTEローミング方式の標準仕様策定を主導し，GSMA（Global System for Mobile communications Association）にてM2M（Machine to Machine）に特化したローミングガイドラインの提案や，固定網と移動網の接続を検討するグループの議長として標準化に貢献しました．また，今後IoT（Internet of Things）分野，5Gなどの次世代ネットワークへの国際標準化活動への貢献を期待され，奨励賞を受賞しました．

＊1　SDH：CCITT（現ITU-T）にて標準化された，同期伝送網のデジタル多重化階梯に関する国際規格．
＊2　ATM：セルと呼ばれる固定長のフレームを逐次転送する通信方式．
＊3　MANO：欧州電気通信標準化機構によって定められた仮想資源マネジメント機能の総称．